

藝苑
叢書

白鷺洲

卷一二

198
合2
415

198-415



1200800018896



198
415

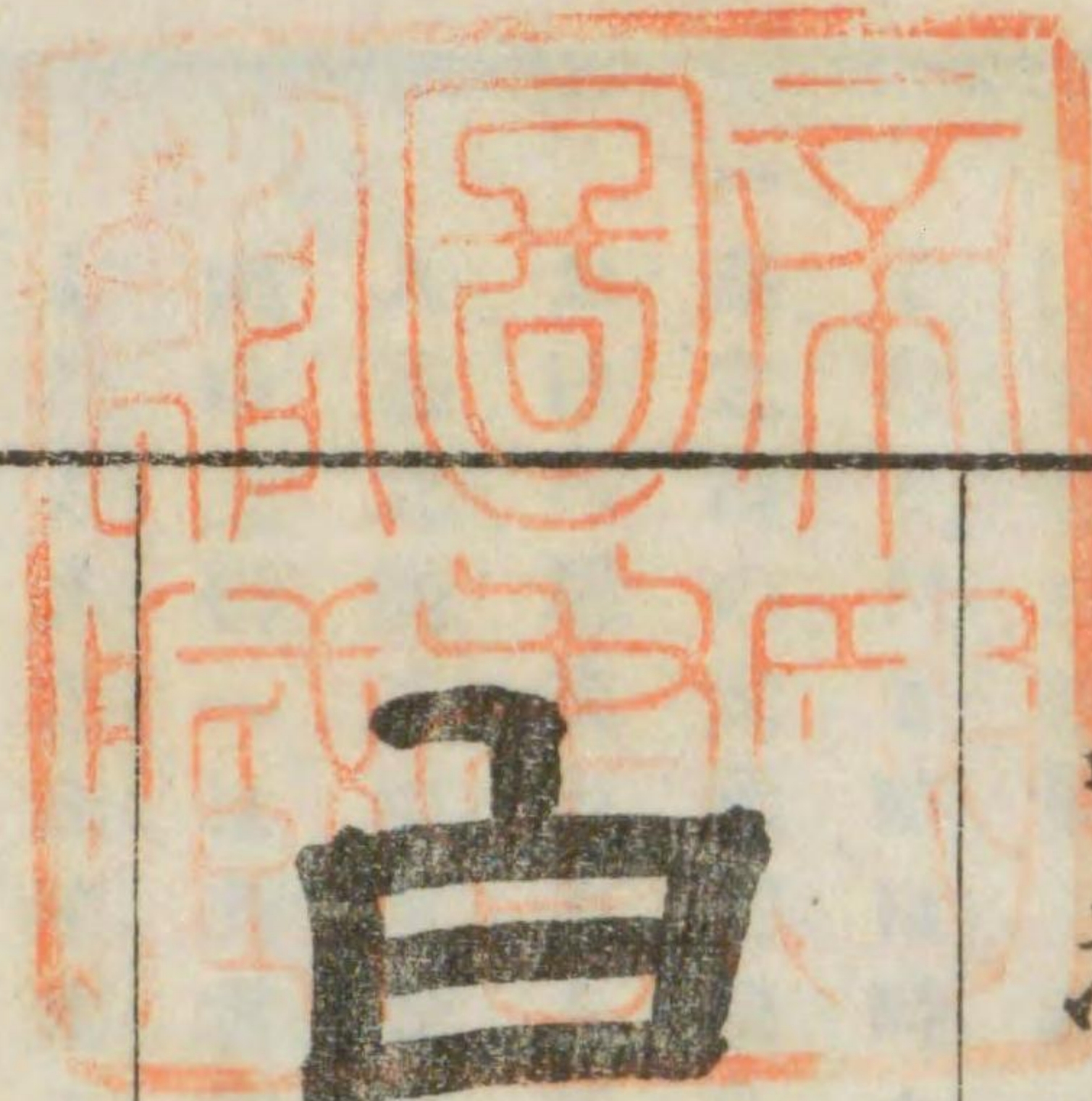
白

鷺

洲

卷

一



大貳探元談
島津久峯筆記

白

鷺

洲

藝苑叢書

大正
9. 9. 29
購求

白鷺洲第壹

本書虫食に而不書載

一 紙表具にて珍敷紙と心得 紙表具の織物にて床え掛り

爲咄由東照方或は高位の御筆之物は尤金入等に 右紙表具古
くなりたる時は時々相改可申いつかたもよく候由咄にて候

一 茶之湯の元祖者奈良松本稱明寺え居たる出家に珠光と爲申人茶之湯
おほへ居候由ある時ちく阿彌など東山殿え御咄申候へは右珠光と申
人茶之湯と申を覺罷在候是は御慰之内に至極心入之面白者と承儀之
由申上候へは夫者御聞被成度とて珠光被招呼直々將軍家御指南いた
したる人之由珠光より紹鷗夫より利休宗旦と相續候右珠光俗氣の毛
筋は當分も奈良え居住候町人の松屋と申者は土門左門と申由は右珠
光の傳來之茶人にて候由右珠光致秘藏之道具も于今有之由茶入は漢

の鶴首に茶くもりのかゝりたるものと承候由右道具拜見せんとては代物等六ヶ敷故人毎に不調候故多くは世の人不存候由國分正國寺奈良えゆかれ候由右之趣を静隱咄被致薄茶手前成共一通御習可有由相すゝめ漸く一通は左門より被習候由

一 小堀殿など其外名ある衆右漢の茶入に爲奇進袋七ツつゝ相こしらへ御上候由

一 右之道億は珠光流の茶人にて候由利休などは器用成人と相あさけり候由道億無雙の大身者故珠光のク様々に被致候と書附有之ものは買入相集一冊として古風を相用由畢竟右奈良の土門家にも相便り習候由

一 珠光より東山之時までは茶杓は象牙鼈甲にて候紹鷗にいたり夫にてはぬるきものとおもひ竹にて本へ節を置拵候由利休にいたり猶ぬる

きとおもひ中に節を置こしらへたる由右紹鷗の茶杓は和泉小右衛門と申人致所持之由其茶杓相拂候はん由前之肝付主殿へ申候へは見度由被仰持參候節静隱も爲被在由夫より其茶杓一座にて皆々取掛りうつし有之候由唯今は磯御代彼方へさし上たるにては無之哉と尤御書院にも紹鷗作有之由右之通末に節有之由右之和泉は女の家之由寛陽院様御代に御局相勤居いか様御心にも叶候人にて段々拜領物之内に右之作之茶杓も有之候

一 道億は近衛准后様毎度被招呼御茶入御茶碗類にいたりこれは何様に見及候哉といくつも御尋候處に一としてくらからす是は何にて候と申候由其節御咄にて候者いか様此品は見及たるかと御尋候へば成程是も所持仕候由申上たる由左様ならば重而參上候砌持參仕候様に御意にて持參いたし候へは寸も違はん其道具之由夫に付准后様御咄候

は道億か所持之品は幾つあるへき限りは御計らひがたき由右通之無限成ものゝ由

一東照方にては専宗旦を被相學茶之湯被成候由利休手跡にいたり餘り澤山に有之似せ物多き故差知たる宗旦を一涯御賞翫之由

一宗旦は後陽成院之時代のものとや候宗旦茶之湯に相達候者と被聞召上勅諭により罷出候處冥加に叶候は御直に宗旦者別而無世帶ものゝ被聞召上候間彌其通かと勅申候を御答申候はいかにも如勅諭別而無世帶之由申上候へは世に名高き茶人と被言小座ももたぬは餘りにて候故大判金被下候間是にて小座相調かと有之難有奉存罷歸直に念比の大工の宅へ見舞今日右通難有勅諭有之由此分にて小座をとゝのへくれ候様に申達候へば此分にては小座は相調間敷候へ共つもりて見適々の儀候間可相調様にいたさんとてつもり候へはとやかくと大判

金壹つにて相濟と申夫より家作をいたし候に纔計の事候へは壁とてもうら迄ぬり候ては手間も入ちや藁も切候ても是又手間も入事候間其まゝのわらにてぬりこめ候由夫を無是非こそいたしたる事に銘人の跡ゆへ宗旦流の茶人は今はわざと切らぬ藁をぬり込候由爐地の飛石も大き石など相用儀も不相調候故細き石にて夫々につかひ足はこび悪敷所は細き石にて五ツも六ツも取合置候へは餘程の石に成候由是も宗旦作之茶人は今は態と小な石をつかひ候由

但右通無世帶もの故小座の壘茶碗置所は其形に相損之由宗旦は至極之佗人之由

一茶之湯のいたり候佗人にて候由道具とても目利有之茶湯の事も知りぬき其後道具も庵相成を一ツも致所持飾らん所を佗人と云
一小堀殿古田殿となされたる事を當分は利休の事に成たる事多候由

一 苛棒とは日本の名附之事也苛棒とは井戸茶碗のかすにて作たる茶器故地あらきもの、由茶を立候茶釜下にて音あわをじんじやうの物好寄といわん南京などの茶碗少しも茶せんの音なく別而ぬるきもの、由

一 臺目とは臺子を半分に切たる事にて臺目はしらと成利休の作也

一 水指に色々形有之もの候へ共竹筒形手もなくよく候由子細は釜にも耳有之尤茶入にも近々と形有之もの候へは水指は手もなく候かよく候由

一 古備前の水指には底へ色々形有之ものに候然共鴻池道億か咄には右水指は何々と申形も無之段々作人の見立にて候故一様に無之由申たる咄承候と静隠咄にて候事

十二月六日

一 南京染付之儀薄きを以古きものにてよしとす

右之儀静隠所持之薄茶入に鶯六疋の南京もの有之近代の南京程花々と厚く染付有之也色薄き程上とす其時茶入に鶯六疋染付有之群鶯とて別而唐にてもめてたき事にいたすの由

一 藏六とて首も足も尻尾も引込て四季共に川の瀬に久圖フとうを干す事あり上方にては久圖の事を石筆といふ本草に久圖といへるは文字出たるよし右聚樂寺後水尾院様御かりやえ藏六とて右御座之内え閣有之右を山本中將殿羽林と深見新右衛門手前を以拜見之時右藏六之詩有之序書も有之候由

藏六とて首も四足も尻尾も引入れ久圖のとう干にかくれて出たるを隠者の心入に至極とせり又は長命なるもの故目出度事にもいたすなり

一 江戸にて段々御茶道具を御目利衆之山本立佐と申人え本田殿進上候

井戸茶碗を稻富幸阿彌立佐え被入一覽候處扱々是社井戸にて候其井戸火のはり等有之別而出來も宜候由無紛も井戸とは是をこそ可申と被譽候に一ツ此御道具え疵有之由被申候幸阿彌より申候は別而無疵物にて候に何とて左様に被仰之由申候へは左候は、可申候呑口とて古く縁染たるをいふと被仰候を幸阿彌扱て、始而承知も仕候由申候事

右に付可考たとへは茶碗呑口の程合を見合新規に呑口付候半に下を紙にてはりかやのみのからを大入にくべたきめしおき十三日計もおき下の方は小刀ふき布にてそろ、と摺落し候てよく候由右も一通に有之候而はあしく候故濃き所又は薄き所も有之よく候由口傳

一 靜隱事今日咄承候は當年迄三十年餘不淫をいたし候か右通養性をい

たし候へは固本丹も何も不入事に候夫故當分の七十六歳に罷成候とも寒中にも夜寐ぬくもり足は夜着之外へ差出由誠に咄にて候夫に付佐土原研月事十六より不淫之由極々被譽唯人に而無之由被申候事
 一大山正林事お須摩様御參宮之節御供に而罷登候節正林事茶道にはうとく有之候へとも茶好奇故駕籠之内え茶箱入附時々者泊休などにて茶箱取出し立候て慰候由然處肥後之内え泊候處宿亭主え姥壹人居候か茶立候を見て扱而、御好奇と見申候よし咄なといたし候處に正林より薄茶一服可進由申候へは忝之由申候に付立候て遣候今一服と正林より被申候に最早三四十年も御茶は不被下餘りめつらしく候間何とそ今一服可被下由申立遣候に頓而内え入納戸之方物を取亂様に有之何事を致かと正林事は存居られ候小き茶入一ツ持來り是は御茶被下候御禮に差上候此茶入之儀は私事若時分三齋様え御奉公申上居

候處不斷御茶之湯有之或時此茶入は拜領いたしたる物に候御禮としてすはだ物のまゝ正林に遣候由

其茶入小ふりとして出來杯は宜無之候由いか様子今大山氏所持たるへき由右之儀は正林より直に靜隱被聞候由茶入出來は不宜候共由緒面白候と咄にて候事

十二月十六日

一北郷民部殿宅へ一休墨蹟之一行之掛物有之右字閑虛月自來と有之候作左衛門殿時分に伊地知助右衛門など被讀置候は窓虛にして月自來とやら被申候由其後夜咄に大乘院不石被參候砌何と讀候哉と作左衛門殿より被相尋候に扱而く是はよき文句にて候閑虛にして月自來と被讀候て被感候由右虛字之儀佛法には第一と致ものゝ由たとへは禪宗にては座禪真言宗にては阿字觀とて是も修行之第一の目當候由先虛とは冬に成候て響もなく音もなく春に成とて目にもみへす是又

音もなく自然と春秋などにいたる天地の間のすさまじきうつろの虚也

右閑之字窓字の因かど被申候其字性は江戸長谷川了察リョウサツと申博學之者有了察字の心をときたるに右閑の字本は窓は角にして中にさんを打たるを以右之たとへとすいわく障子之さんも同じ事之由右了

察年寄候て拵へたる千字文の字訓致たる一冊本有之ものゝ由

亥三月十四夜

一當分平田兵十郎殿病氣有之由に何共にかく敷御事と咄被申候に拙者より此比草臥の痛の若き衆へ風花之由申候へは靜隱被申候は別而大き申事候へ共自害する様成事にて候と被申候左候て或書物に右之たとへ有之由刀にあめをぬり候て犬にねぶらせ候に犬は味を知りておのれか舌を切る事を不知と申有之候はよきたとへにては無之哉と被申候扱又いんほんをおかす事は何藝にもあしく候と見へ候子細は

釋迦の御徒弟にあなんと申たるは誠の大徳也あなんの語に沙を蒸せとも飯にならす久敷蒸ても飯にならすと被仰候事より見候へと咄にて候事

右沙を蒸飯に不成と申事古語之由にて文句全く不覺候事

一静隠へ申候は御手前程繪もよく御修練候と少しも御不足之御見及は御書跡にも無之筈と存候今時諸稽古師範に自慢計にて候のいかゝ有之候哉と相尋候へは返答に自分十三の時より當七十七歳迄不斷繪を書申候に今迄に間燈の火にかけ是こそ出来候と存候は毛頭無之折節夜も入あんとん有之右の燈を指さして右之通被申候左候て右通之繪を後年に残すと存候へは後悔候へ共無是非候由被申候其後にて古法眼雪舟探幽尙信などの繪を見候に中々不及と存候先何事も師匠を

するものは自ら高ぶるものに候是か何にもあしき事に候法花經之内に釋迦の御言葉に自高心を滅却すと申事の候是は第一の手本と存始終是を宗とし不忘候と被申候又々申候はたとへは手を習候に尊圓親王計見掛習候處に習へは習候程不似猶々深き事候人の見る處はいか様似寄も候哉見究所一ツに候へは外に目も不寄候と申候に成程目當之事は夫か肝要に候先尊圓親王は唐を專御習候上御書出しの字に候へは世學別而廣く被成御座其跡に而候間中々及不申事に候先申見候に大坂に何とやら申名醫有之其弟子とやら申其弟子へもきけんとかとて候にけんとか自分之咄には大坂之何々の孫子にて候へ共自分程の下手醫師も有間敷と被申候由是にて御考被成へく候由左候て又々申候は御手前師匠は探信にて候哉と申候に成程探信にて候と被申候探信は餘り書は不勝にては無之哉と申候に成程下手にて候へ共當分之狩野など中々相叶ものにては無之候夫に付又申候は自分師匠探信

親探幽にて候に静隱は孫弟子にて候に左様に下手も候とつゝいて咄にて候しかれども難申候へ共數年書習候故つがもない事は無之候と申候事

一御手前など御覽候て等頃は等破などは繪もおとり候はん由申候へは先教月などゝに合せすと引下りたる繪師之由折節あんとんも有之候故あんとんの下の涯より疊五六枚目よりもまたおとり候と被申候

一大島何某と申人此節御手傳場え被相詰居候に養老之瀧之水を竹筒に入是にて瀧を所望候に是は格別成儀與存則書遣候由咄にて候右水入付被持越候竹は直にもらいおかれ候て自身細工にて竹節之中より引切釘かけの目を明け其裏へ年號月日自身名を被記養老と書有之候右に付相尋候はたとへは京都などより音羽又はみたらしの水などとして

持下候を繪を御書被成候に水に違は無之哉と申候へは返答に隈をとり又は色々といたし見候に甘酒とせい酒程之程にて候と被申候是は王城之地程之違にて無是非候へ共差而替りも無之先はよきめつらしき水に而候と被申候事扱其後にて被申候は何杯とやらにて數奇やなとの柱に用杯也丹波より切下し大井河を筏にして王城之地へ乗込彼を見き候と其杉間ひ有之候而高直に候由ケ様之違にてとかく京都は何も相替候由又と石之事是王城に添たるもの也外よりは一切不出候志賀の跡などゝ申候而もと石は別ものに成と見候て都の跡と申候ても一切無之ものに候事

一久しき事にて候阿波國へ何岩とてよき出家有之候右へ京都之童共參候に爲土産大津繪に鬼之片角折れ奉加帳を持居候繪を以參候に是はめつらしきものをくれ候とて則其讚に被書候由とてある出家の咄候

由にて被書留置候を寫

鬼の角おれぬも佛おれたれば上々吉の南無阿彌陀佛

阿波丈六寺

鬼中間凸岩讚印有

右之讚にて候てつ岩とは右出家之頭に瘤有之候を世の人テツカンド申候を直に何岩とやら申候を直の名に被用候由其後にて人は日本にも唐におとらす出來候由咄に而候事又木村四郎左衛門殿事右之通之天津繪にもくひと申出家へ讚頼候て候處に是は右凸岩之讚とはちかひ出來候はす候由被申候事

一此間肝付彈正殿所へ茶之湯へ參候を承候由御掛物一休にて候由被申候に成程其通と致返答候に右之御掛物は別而勝たるものゝ由右外には京都に而道正庵致所持候大色紙の一休是二ツより外にめつらしきは不見候由咄にて候右道正庵所持之一休は靜隱へ道正庵風呂の茶之湯にて相掛候由其歌に

都いてゝ心つくしに行人の夢に目さます淀の曙

右之掛物にて候處に靜隱爲被申候由は是の掛物は自分か事かと被申候に道正庵いか様左様成にても可有之と致挨拶居たる趣之咄候事

一右段々咄居候に郭公三聲なき候と申候へは耳遠く候故不被聞入候孫村右衛門殿被居兩人にて聞候由申候へは西行の歌とてめつらしきとおもひそあへぬ郭公春きくことのためしなけれと右の歌を被吟候左候て五文字めつらしきと有之との字の下にめつらしとぞ唱見候へと被申候て感し承居候又々澤庵の歌とて

おひらくの耳にはうとき郭公おもひ出るや初音なるらん
此歌の心にて耳遠くたゝおもひ出たる計と被申候事

一戸田平次殿と爲申人之咄にて候由静隠被申候右平次殿事膳所へ仕居候人にて中院通躬え歌御門弟にて候由或時通躬公膳所へ螢見に御越可被成由にて平次殿先達て茶屋など借受吸物等にいたり用意いたし居被相待上頼而御入螢御覽候に平次殿事歌を一と案被居候に通躬公御意候は平次には歌を案し居様子と相見得御咄をも不申上被仰候へは能折からにて候とふぞ一首いたし可掛御目と存案罷在候由被申上候へはケ様之所にては歌出来候ものに無之候夫故通躬公も御歸宅有之候てとくと今晚螢の御歌可被成御讀由にて其場にては御考も不被成候と御咄にて候事

一周文と申畫師御座候由いか様成繪師にて候哉相尋候處越中か越後かの畫師にて候越後の周文と有之由周文とは不唱周又と唱候由右之人は雪舟師にて候由然共繪は雪舟とは格別におとり候乍然先中畫師と申ものゝ由咄にて候事

一不角と爲申人近代之上手之俳人と存罷在候静隠事若き比於江戸前句附をいたし見候時分右不角相集候板行本見申候て能覺へ罷在候由其中に

崩れかゝれる家二三軒と申前に

職かへて菅縫ふ志賀の烏帽子折不角

右感吟不斜由又々不角事は能書にて板行本は我から書候てほらせ候由手跡は宗心様に似たるもの之由

一彌寐殿先祖に歌人有之其歌に

旅なから旅にもあらぬ心かな芷の吹雪の志賀の山越

右者其比上方にて右之歌世に名高く其人を志賀と申たる由

一波のうつを卷には なけ舟をのり通ものゝ由右通成門より不角發

句花のうづ編笠かけて通りけり右者別而はてな句にて候由靜隱咄に

而候事

四月廿三日

一禁裏にて候哉大極殿と申候て殊之外廣き御座有之禁中様にも一ヶ月へ一度など、申候て御入被遊事候に大黒殿と申す額は弘法大師筆之由

但額之儀に付習の筆くわく有之もの、由つよく押付口傳たるは水しノと點を打たるは陽にて火なり字の善惡に不依額はならひあるもの故猥に字を見ては不掛事之由

其額大の字を火と大師被書置候又は朱雀門の額も大師之筆にて朱之字米之字之如く見へ候を小野道風拜見いたし大師之儀能書とはいへとも此大黒殿朱雀門之額を見るに大の字は火里殿又は朱雀門は米雀門とよみあさけり候に忽大師の使のよしにて天より天くたり道風の片を蹴しに道風肝をつふしる候に虚空に又立あがりにはわらんぢ見へ

ると申候由然に額の字は別而筆くわく六か敷御國にも何某失念有之もの、事候に大師なせに火黒殿と可被成とよしは無之候へとも此日本に大黒殿とて餘りきやうくしき廣間と胸中に被思居候故にて候に哉火難に逢せたきと被思居候由申傳へ厚き事にて候を道風などは不知と申候事

四月廿三日也

一今日薄茶を立候に茶碗は古帖佐と見へ候故古帖佐にて被見と申候にか様之事は序々により氣を附候かよく候間可申聞由にて咄にて候子細は茶碗の縁フチに鼠色之藥少しかゝり候是か見所にて候惟新様御代御用計之白焼を燒候ては渡世難仕候間協方用事にも相成拂方仕度由申出候に尤と被思召上左候は、脇方へ出候はしるしをいたし出し候様に被仰付夫故右承色之藥をかけ候て出し候由是にて古帖佐とは不申事其後より只今まで立野にて燒候も右之例を以かならず千鳥類之

事を印候事之由

一奈良にて法輪味噌と申候は寺より賣に出し候由右味噌は名失念出家にて學文に被精出晝夜心掛被爲候に問答に及びまけられ候を其後又々晝夜の境なく必死と學文にて書物を飯之片手にも見ゐられ候に其母より餘り學文とは有なから右通いし候ては草臥に及氣根もたまたらさる筈と被思召法輪俗に味噌右をめしにふるひかけられ候は、汁にも不及とて其節切々被出候由にて唯今も有之よし御國などにてほろあへとて色々いたすも大かた此心ならん然るに右味噌奈良にて賣候に寒中にて無之候へは賣に不出候由子細は中途遠路ならはいたまん故也所中にてはうりのよし尤意味ある事之由

一中將姫は東照方の御娘にて母におくれ繼母之惡により間夫を持居候と惡名を世に唱られ其後雲雀山と申所へ引入其後大悟の女姓にて候右御姫さどりの文之由

中將姫山居

男女無_{スレハ}境界愛欲無_{スレハ}思獨住勤行無_{スレハ}怠亘貧窮無_{スレハ}福者無_{スレハ}盜賊思無_{スレハ}念佛行人經教無_{スレハ}所望妻子無_{スレハ}眷屬瞋恚無_{スレハ}起朝夕無_{スレハ}燈者心月爲_{スレハ}燈木食草衣身諸人不受惱我出_{スレハ}心佛見_{スレハ}木佛無_{スレハ}所望

なか／＼に山の奥こそすみよけれ本草の人の言をいわねは

右之文にて大悟を知る

六月朔日

一小堀遠州之御判を見申候に水姓に而可有之と被存候子細は忝か様之判にて候へは天の字と相見得候下者一の字にて候天一水を生にて候故大形者水性にて候はん推察いたし居候由被申候事天二は木を生し天三火を生すにて天一之事也

一押川元春試筆を見申候處六吉元春と御座候はいか様成儀にて候哉と

相尋候へは黄道謙書跡に吉六黄道謙と有之候を琉人え元春より被相尋候へは坤の卦之人にて六かうのよきをとりて吉六黄道謙と書有之由元春も同しく坤之卦之人にて則黄道謙え相當候故六吉元春と號候由靜隱咄にて候事其跡にて六かうの吉を取候へとも早世いたし候由被申候て物笑候事

一 溫庭筠之詩に

鷄聲茅店月人跡板橋霜と御座候は扱も面白曉之景にて候と咄いたし候に夫者名高き事にて古者京都えなけふしとて有之候其内にも右之意を京なけとて諷候由又者頓阿之歌に

今朝はまた人の往來の跡もなし夜の間の霜のまゝの繼橋

是則人跡板橋の霜にて候由被申候事

一 靜隱若き時分西田え居住被致候町田七郎左衛門と申へ朝茶之湯に靜

隱稻富幸阿彌被召招候に冬の事候に夜明け前より雪少ふり候に西田橋之上最早一人通り候跡有之候を靜隱被見扱も早く人通有之儀と被存居面白景と被通行候に右町田氏門(マ)と幸阿彌者最早控居候由扱は右橋之人足者幸阿彌にて見と申候へは成程幸阿彌にて候と被申候事

一 大智和尚と爲申大德之出家者筑後瀬高に生性之人之由七八歳之時より萬十郎と申たる由相勝たる生付之由萬十郎之親瀬高之寺え右萬十郎幼少之比つれ行右寺の和尚え申候は此者可遂出家望御座候由列行候て申候に是は尤之由にて挨拶共相濟候てまん中有之和尙より右はさみ被造候てまん中を食へと右和尚より被申候に萬十郎取も直さす大魚吞小魚と申左様に幼少之時より勝有之たる者之由其後に候事にて候哉出家せんとする時右和尚より名を小智と可附由被申候にいや小智は嫌候大智と御附け可被成由にて自分より大智と申于今名高

き人にて候事

一大智の録は隱元和尙杯是計をいたし候被見たる事と靜隱咄にて候事
 一水戸之交易と爲申和尙は近代之智者にて候寛文之比之人也寒山詩集
 杯之註も右交易之註也是に付寒山之事も凡咄にて候寒山と爲申人は
 年も不知人之由詩を作たる時も石に書付或は木之葉類に書付置たる
 人之由夫故繪かき候に童の髪を結たるやうに書たる寒山はあしく候
 由ぐりくくと柴の葉などまけたるやう書か能候由

一靜隱京都え滞在し被居候節近衛様より年頭に御歌之會有之候間罷出
 拜見可仕由にて御珠簾越に拜見まうし候由御上壇中に近衛様右左右
 に宮様方御敷居越左右に諸大納言中納言それよりその跡へ宰相を初
 め諸太夫迄列座にて御會有之事之由左候てとくしゆ者右御上壇下之
 間之眞中え被出取次を□より一ツつゝ被相渡惣吟にて候最前者諸

太夫之歌より讀み被申候由總而相濟近衛様御歌は已上三篇にて候由
 々何を同じくよめるヤマアトウ歌ととくしゆより被吟歌の五文字は
 殊之外高く有之たとへは藤原中納言何々と名乗迄も被爲讀候節は不
 知様にひきく候由右御歌など誦相濟近衛様より飛鳥井様の詠吟をど
 御意有之候處不及御返答にも佳辰マツ天月と迄は御諷被成たるもよく知
 れ候へとも其跡は何とも聞分たたく候由大形謠などへ似候由咄にて
 候事左候て御子息は列座之所より御附け被成候由詠吟相濟檜之木三
 尺計之長き棒に長く純子を巻き詠吟被成御方へ御拜領にて各退出候
 事此時にて候哉元春探龍もめしつれ候様にと有之同道にて候由
 一美代六郎兵衛殿え自畫自讃を書遣候由咄にて候其歌
 夕立の一むら薄露ちりてむしの音そはぬ秋風そふく
 右慈鎮和尚かと覺候由

一飛鳥井雅永卿御短尺を今日見候御世は覺へず候餘りよき歌とおもひ
覺居候由美代六左衛門被參居咄にて候を脇より承候其歌に

月前時雨

見るまゝに露のやどりは數そひぬ月にいとほぬ村時雨哉

數そひぬるの意を被申候事

一禁中臨時之御祭之節靜隱へも供奉可仕むね近衛様より被仰候由にて
御供の次第最早其比より剪髪にて候ゆる黒頭巾を耳の上にかぶり其
上へ烏帽子布衣さしぬきにて供奉すへき難有上意にて候由師走之事
にても候へ霜つよく候に右之支度にて別而難有奉存候由咄にて候
一紫震殿御庭へはまくをひき諸官人被爲居候内侍所之方へは御椽ンに
近衛様にて候王様十二間之廊下を御出被遊候節殊之外御道靜成こと
にて御ささへ腰をくゝめ横に燈松を持ち王様御跡は諸大納言之衆に

て候内侍方は御玉體に近く見へ候由右十二間の間はかけ挑爐にても
これもあふら火の由左候て御家くゝは音曲の奏し紫宸殿の廣庭の前
へ裾を引しはらくつゝ奏し給ひ其夜は明候て御祭相濟事之由靜隱は
始終相詰候は退屈も可仕候間見合候て御暇可仕由にて夜八ツ時にて
も候はん御暇にて退出之節又々書おくれ候王様御出被成候節は御足
のあかりに落付候はからくゝと打拍子三十幾ツか打候とき一足ツ、
御歩み被成候由その時之王様は中の御門様にて元存申候よし裾を御
引被成候を大納言之御衆弓にて持上げ御出之由又はおん曲有之双方
え人杖シシヤツとて柳の枝を胸にかゝへおん曲相濟迄は動もせず相つとめ被
居候由柳の枝は逆枝かにて長サ三尺計にて候由誠に殊勝に見へ候由
人杖と申事井上宮内へ咄被致候に人杖とて神書には有之候へとも何
様之事も不知候に是は珍敷事を承たるとて悦にて候由幸落し事も可

有之候へども先此分留置候

九月十五日歩行御暇内にて參候

一南京染付に細きくわんにゆう有之もの有之南京吳例と申候哉と被相尋候處南京吳例にては無之候唯南京之中に一通染付など有之ものにくわんにゆう有之焼物有之候あまり此物は宜ものにては無之候先南京物と覺有之候へは相違は無之由承候又南京吳例と申候は持合候あやむと申歌の字有之薄茶碗の直に南京吳例にて候由南京吳例よりも高麗ごすを賞翫いたし候由

南京錦手と肥前燧錦手とはいかゞ違候哉と相尋候へは古き肥前之錦手は南京錦手によく似寄たるものゝ由被申候見申候に是社見所と申候廉有之哉と申候へは其かゞは見不申候ては不申候由

一帖佐焼割香臺と申茶碗薄茶を被立拙者給候處古帖佐にて候哉と相尋候へはいや古帖佐にては無之候子細は白くすりに少々あめ色之色か

ゝりる候是か帖佐二代目などより商賣釜にいたし其まきれ無之様にあめ色の色を少々かけ候由其時代のもの候故古帖佐にては無之候左様に可存由

一茶入に底に絲のまわりて瀬戸元祖と有之候を見て時代はよろしく相み得候へ共たゝあめ色之藥ひたすらにて少しも藥違候處も無之故ケ様之景每無之ものゝ先不好候いつれ茶入は中より上に一景無之候へは不好候由被申候

一織部焼又は唐津焼杯に藥のつよくかゝりて止有處をかいらき先キとも云又は露先とも云

一佐土原より古月和尚大徳寺え被參居候故靜隱にも右寺え參合候處色々々の咄候自分には手足に痛有之候などゝ被申候に右古月和尚え相附來候瑞嚴と申出家申候は手足之痛にて候へは能藥御坐候御傳授可致

申候へは是は何とそ習度存候由被申候に先咄御座候加賀國御用人役相勤候人之悴に若年之者有之鎗稽古いたし晝夜之間少も無間斷情を出し後には鎗も上手と申程に被成候然に俄に手足に痛出來最早必至に鎗も不被成痛相増段々藥用相盡し候へ共一圓其印無之四五年は唯病氣にて最早快氣可致儀も無之候と存居候を其國之醫師に痛之譯被相聞自分よき藥を存知候間被相用間敷哉之由被申候に右病人是は幸に存候由にて可給由申候へは則是利目不相知筈候三四年も相立候は少々はしるし可有之由にて丸藥にいたし四五年たべ候處に本之如本腹いたし候由承傳候先此草にて不斷御用被成間敷哉と申候て調合之次第左に印

めなもみと俗に云

右草を五月五日又は六月六日又は九月九日右日數に一度とりせいろ

うに入もし候に酒と生蜜とを一分に入時々せいろう之めなもみの葉に打九日ほど一日に一度つゝ蒸候と蜜之氣にて中々おろし候様には難成候故日にほし其後藥研にておろし又々蜜にて相まるめ丸藥に些大く十二三粒ほどつゝ毎日相用候由靜隱事は數年相用被申候へ共差て其印無之故拙者へも相用候様には難申存候へ共醫師杯へ本艸を見せ可然由申候は少々は持合も御座候間入用候は可申越由被申候其本艸に功有之事又左に證

九月十七日

一あまらくと申ものはいか様成ものにて候哉と相尋候へはあまらくと申ものは中々世になきものゝ由承候子細は京都樂の家に彌平とや申もの有之由其咄にも私先祖あまらくと申焼物は卒度見不申由家之者も爲申と申候へは中々脇之人可存事にて無之世に稀成事と可存由候事

一瀬戸半切と申は何様之譯にて候哉と相尋候へはいか様茶入之平キ所
などより申候哉不存候旨被申候事

一此間相求候織部大茶碗相求候段申聞候へは是はいけたものにて隨分
秘藏いたし可置由被申候其後又織部焼を得と相考見申候に唐津織部
と見へ候由被申候に付唐津織部とはいか様成事を申候哉と相尋候へ
は唐津にて候織部焼を似せ焼候由先出來別而かたく出來候もの故此
節相求候も唐津織部にて候はん存候由承候事

一川上因幡殿え寺澤志摩守様より被下候繪唐津の茶碗別而かたき出來
にて繪も有之候に焼くされたるものにて青磁などの様に有之候是又
殊之外いきたける道具にて候素人は不出來之物と可存程之道具にて
候へ共名高き草人にて被下候ものもよく見申候に別而勝たる事
と存候寺澤様之時は切支丹發行之砌にて寺澤様奥方誰か御娘にて候

哉此人右宗にて奥方より之御すゝめにて寺澤様にも切支丹と成被申
候由その後權現様御さつとうにて別而御法度に被仰出候節相つふれ
候由左の次第無之候は、茶に名高き事小堀殿古田様などの様に可申
存候由唐津焼之元祖は志摩守殿唐麗歸陣之節被召列候もの、由
一樂焼に入と申もの、焼物はかたき出來にて時代小古く有之唯今は
少きものと被申候

一鴻池道億は朱光流の茶人にて境之人之由右咄に當分京都などにて茶
之一體を爲存人無之と申候由其子細は朱光も利休も境より出たる人
也先申候に好奇屋にて飾付をいたすに一景有之ものにて候ねはぬる
く御座候麻上下にて屹と見申道具にぬらき物にて候へは無益に候此
心得にて諸篇相心掛見申候へと承候其跡にて高麗の金海と申者はい
か成ものにて候哉と申候へは右金海は茶之湯には先相用不申ものに

候あまり見事に有之ぬる候先井戸を第一とし井戸の作り糟にて作候いらほ又は井戸の粕にて不斷魚の汁などたへ候用に相用候とや此三ツを至極賞翫仕候金海などは見事に候熊川は都にて作りたるもの是又見事に候井戸は田舎にて候へ共あらし細工の所より賞翫いたす事にて三傳杯も見事成ものに候間いつれの筋茶之湯は世を離隱頓者の心に成茶を吞申候が本意にて候たとへは掛物も聖賢之語をとり子日など書申候てはのり不申候故隱頓などの世を離たる事より句の相應成を第一といたし候由被申候に付民部殿所に窓虚夕月空來などは誠に茶の掛物に可被宜旨候へは成程あの類を第一といたし候由一夏の禹王を水(つゝ)を納給ふ時泰山を堀ぬかせられ候砌種々と不思議之事有之候由其事を書載申候書を山海經と申候由經之字有之候に付てはいか様教に成へきものと存候佛家にては山海經を仙海經と申候歟

と覺居候由陶淵明之詩とて被見候面白く存候右詩は定而可相寫存候事

一いつそや靜隱より貫候赤繪之薄茶碗は高麗吳例と相見得候由南京吳例高麗吳例と申候歟たゝ吳例と申ものも候哉と相尋候へは惣而高麗吳例にて候尤南京吳例とも申も有之候へ共別にたゝ吳例と申は無之候夫故靜隱被申候は自分取持いたし候小花生に高麗吳例有之候間可見せ由にて見申候處に細きくわんにゆうにて黒薄き模様に花など有之かたき出來之ものにて候

一茶を摘たる壺之上に少し紙に包有之候はいか様成譯にて候哉と相尋候處氣の不洩様にとの致様にて候夫故茶には餘程念を入爲申ものと可存由薄茶の中に濃茶入候に三月廿一日摘と書附有之候は書調候墨より違(ちが)し候由常の墨には塵香入候にて其墨にて相調候へは氣ぬけ惡

敷候故墨も態と調置ものゝ由

一此間相良殿方より相求候いらは茶碗之事申候へは自分いらほにて薄茶可申由承候夫より子息嘉右衛門殿可持來由被申候て代召をひらき手つから手前にて候右相濟得といらほに氣を附見可申候相求候いらほえ少しも違無之候此間見申候跡に又々得と見申たる時重而見候得は模様社違候へ其焼かた不相替覺申もの故是か目利の第一の稽古にて此節相求候いらほも靜隱所持之いらほも時代同く相見得候由然其靜隱所持之いらほは^(大)大か有之候て不宜候由此いらほにも又は高麗茶碗も外トにへくめのするゝとまわしたる所にしようふなどぬりたる様に薄くすりある事とふも不言ものにて候由此へくめの所日本前のものには曾て無之由承候事

一古き人の咄にも茶之湯道具と爲申時は一景有之ものゝ候其品々は茶

入茶碗水指にいたりても同前と夫故飾付惡敷時は道具が若きと申おりたる由若きと申はぬるき茶の湯道具にては無之と申底意之由

一佐土原の古月和尚無病之時唯身の中かゆみ有之夜も臥申されざる程有之候處弟子瑞嚴申候はきれん丸を調合いたさんとして古月被相用候に即功有之候由大徳寺にて瑞嚴より承候咄にて候左様て御當地の醫師者めなもみの事委細はしかと不存候由扱又御當地にてきれん丸の初りは靜隱自分にて候と被申候藥丸新藏殿痛有之候處右藥の儀靜隱え貫に被越候處少々遣被申候處即功心持よく有之候由被申候へ其本虛病故其中被相果候左様成はいか様證據も少く候歟先若年の衆などは即功有之ものゝ由唯人間の常に相用候に別面の藥と被覺申候由右きれん丸又はじゆんしん丸白述散右三ツを日の中に三度つゝくり廻しにたへ候由隨而右□丸は上戸は酒にて吞下戸はめしの上湯にて

吞候由

九月廿日

一 靜隱事若時分四五人列立何とやら申唐物や所に道具見として被參候處らいほんに柿色有之是はめつらしき物と存取申へく存候へ共其篇とて差置候處に後日に右唐物屋に逢此間のらいほんはいかゝ致候哉と相尋候へはいつ方の人持行被申候哉其後不尋出候由申候于今殘多存候由

右咄相濟此節朮岡藤八大島へ被行候に被元にて堀出候茶碗之由にて土産に貫候由咄にて候を近く被召置候は、御見せ可被成由申則内證へ被引入被持出候を見申候らいほんは幾見申候ても同し形の外には用に不立候由此茶碗も白焼にて候事

一 かうかち焼と申候はいか成ものにて候哉と申候へは茶碗茶入等は賞

翫不致候香箱は相應成ものゝ由

一 芦屋釜と申候はいつ方にて鑄申候哉と相尋候へは攝州芦屋の里と申候處に唐人來り候て鑄申候に太閤様御代にて種々と御好有之または諸大名方より色々と形を調御頼故程經候へは右唐人も餘り隙無之六ヶ敷存候に付信州の内てんめやうといふ在郷にそろりにけ去我儘に鑄候をてんめやう釜と申候是が唐人の存の儘に鑄候釜故今以賞翫いたし候由唐物屋にてもあしやより後チのてんめやうを直高直に有之由咄にて候

但子細はてんめやうにて鑄候は唐人の胸中よりの存分を鑄候一此節從知覽取寄せ候てんもくの茶碗入一覽候處あまり出來は相應に無之候へ共やはり唐にて候由薄茶など立候砌唐津何歟と重茶碗などにて相用候節中などに右てんもくは相用可然由咄にて候てんもくの

よき出来は糸のことき糸かゝり至極めつらしきものゝ由右てんもく
を立候は必元日に大ふくに用ものに候又候茶を立候に茶釜ほうしの
時も音無之様にいたし又茶杓をたゝき候節もふくりんに不當様に中
カにてたゝき候由然共大形は此てんもくの立様を別様に覺居常にも
濃茶手前などへ相用候人有之候是は別而誤りにて候扱又此てんもく
は伊勢天目とて只今も伊勢にて焼候由然共見せ申候茶碗は唐にて候
由左候て薄茶持參いたし候に拙者へも自分にも手前にて茶を吞申候
事

一古萩と申茶碗はいか様成ものにて候哉と相尋候へは古き萩は上方夕
にて鬼萩と申候て別而賞翫いたすものに候由井戸茶碗に成申ものゝ
由是にて推察可致と承候事

一上城ヶ谷とやらに居申候人に出家を遂黄蘗宗に成申たる人に雪士と

申候て殊の外黄蘗宗の事は存不申と申事も無之程に廣き出家有之候
其人之咄に承候黄蘗宗にて京都に被居候砌同宗之出家今日は天氣も
好候間京中見物として可列立由申候て可然由久々歩行にも不罷出候
間列立候て方々へ見物いたし居候に長屋有之候所有之其長屋にしか
と人の栖居候様子も無之又は栖家無之所共難見分有之候に近への町
屋へ行相尋候へは人居も御座候常に門を立有之候故其門を御たゝき
被成候と中より對候由然處に門を扣き候に誰にて候哉と申中老之士
出し毛髪の人出いつ方より御出にて候哉と申候て出家共にて候あま
り物靜成御栖居と見及申候に付拜見仕度罷出候由申候へは御通可被
成由にて又々門を鎖中へ入候に廣き庭の少も繕不申別而奇麗に有之
處に參見候へは庭の中に茶釜を掛花までも正しく生け手水鉢の水も
今朝汲たると見へて座之中には硯と紙も置別而心有栖居にて候と見

及庭の中方々と見廻り候中ちに右中老之士より申候は出家方御茶參らんかと申候にて是は可然と申候へは薄茶を立進申候由然處に右出家より申候はいか様其元様には御亭主にて候哉と相尋候へはいや亭主にても無之候世におちふれか様に主人の假屋守と相成長やのかやふきより煙を出し申役目にて候と扱々不審成事と存居候由あまり物替りたる氣色に候故不圖詩を考付御座候内に御座候硯紙を御借可被下候詩を作候間書附可申由候へは右中老の士よりもいや御無用に可被成候紙もついへにて候間夫に不及候由申候にて空差置候由先別而相替りたる事も有之候と咄にて候由靜隱直々承居候由

右咄も靜隱庭の南川の方に灰汁を焼被見候て少々煙り立候故右煙を被見少々立申候烟はよきものと被申候より右之咄有之候
但雪土と申出家は若時分女色之事にて世上にて色々と申立別而鹿

兒島にてはあの出家かと申賞翫不致候然共上方へのほり黄蘗之方へ相附年寄迄罷る候由老後に御國え罷下り候に付壽國寺より老僧の事故壽國寺之上に小き庵を拵可進由被申遺候へはいか様見所有之候哉被相住野附ノツキの百姓村之後口に居住致し候様之人之由然共若時分之事を人舉而存罷在候故賞翫不致候て尋人も無之候由然共方々手廣經めぐりたるもの故咄共可承と存候人は參候由其後にて靜隱咄にて候は出家と申候ても若時分はいか様成も有之候へ改候てと手のはらをかへしか様に成申者はよく候由當分諸御役人方も見申候に外より聞申候へはよき人と申候は無之と被申候事

一床の掛物に西行法師鳴たつ澤の掛り有之候處右は當秋も今日迄にて候間悴嘉右衛門へ掛候へと申候て掛申候由右は禁中様より拜領仕候掛物にて候夫に三夕は東照方え□三夕拜領又は純子三卷拜領仕候其

とんすにて中へりはいたし候由禁中様直に拜領と申候は別而冥加にて殊に例無之事に候畢竟近衛様御威光にて候由

一引次に咄にて候は西行法師此歌を得と吟し申候に只ならぬ歌と存申候西行にも自分此歌は出来歌と覺被申候由仔細は西行奥州え爲修行被行候に京都にて歌撰集有之由被聞及是は存生之内に撰集有之は幸の事候とて京都へ被登候道中にて能西行被存居候出家え被出逢扱々久々に逢候由挨拶共有之扱京都にては當分撰集有之由定而于今可有之と存申候由西行より右出家へ被申候に付右出家は京より下り候砌にて候故右之次第被相尋候に最早撰集は相濟候由其時西行咄に自分之鳴たつ澤の歌は撰集に入候哉と被相尋候へはいや其歌は不載候歟と覺候由被申候へは右之歌不相載候へは京都に登に不及候とて又々中途より引返し奥州へ被下候由

但右之次第故西行にも自分出来歌と覺被候由是にて相知れ候左候

て此咄たしか成事に候頓阿の歌集に井蛙集キアと申物に有之由

一床に花生にかるかやを生被居候を自分被見候てかるかやは亂るゝ所を以賞翫と仕候是にて存寄子細候必自分杯のことく年寄に妾を持が色々と亂るゝ無了簡の事御座候夫にて江戸上野だんな院公海僧正と申候人は烏丸光廣卿御門弟にて候此御歌に

今しはし此世にやとを苜萱の花のこゝの亂すもかな

扱々心得によき歌と静隱被申候事

一弘法大師の句に

麻中蓬不撓ルニタ自直し

此こゝろをとりよみ人不案の由

直しとてあさのよもきは みたれてもあれ野邊のかるかや

一けんさんの茶碗に覆輪無之も候歟いか様渡りにも無之ものに候哉と相尋候へは皆渡りは唐真鍮にて覆輪有之ものに候へとも落申たるも有之候故いか様其通にて可有之由

御書院などへ有之てんもくは別而見事成ものに候昔は皆てんもくに
て臺子手前殊の外六ヶ敷ものに候を慰には不罷成却て退屈に候故利
休發明命を以とんと仕替へ申候けんさん之臺子にては茶抄鼈甲か又
は象牙などの類にて相用來候故是も利休より竹の節を置作直し候由
右の次第故象牙鼈甲の類にて候故てんもくは中をそろりそたゝき候
由何そ覆輪の落しなどゝ申にては無之筈候へ共かたき物故右の次第
に候夫を直に常の手前にも相用候は別ての覺違に候事
一利休は俗名何と爲申人にて候哉と相尋候處千ノ與四郎と申候本刀の
目利など仕居たる人之由

一利休茶之湯被致候砌二三輩麻上下にて被參其時々の小座え被入候砌
當分亂國にて候は有之候故皆々脇差を不離數寄やへ被入候に利休よ
り被申候は各は脇差を御指被成候かいつれ茶事に付ては共に一致い
たしくつろき候歟よく御座候由申候へは各其時扱々失念いたし居候由
にて罷取たると申傳候其時跡達而利休之咄に當所境のは高野の前門
に候へはたとひ諸々大亂之砌候共中々不相支所にて候由得と御落付
可被成由申候咄にて候事
一紹鷗は俗名は武田因幡守仲村と申候事
一境の宗願と爲申人は別而すね者にて候右宗願の數寄屋の圖を古き書
物にて見當候由爐を入疊の目より座之中にひくき壁を仕道具など出
處に細き障子を引立に致候て召置たる由手前の時は右障子引立候由
一高麗入之時何國にて候哉御取逢大事に及候砌惟新様被遊御座先へ大

一軍寄來候に山田松嚴若年にて御先にて別而働き有之候に切たをし切
伏せ手涯有之候少々薄らき候に御狹箱より御茶碗一ツ御出し早束之
褒美と御意有之拜領被仰付候に松嚴より是は幾重も難有奉存段被申
上候へは成程一ふく立ものよと被遊御意拜領にて候由
一右之咄は山田一遊殿より承申候其時相尋候は右之拜領御茶碗御覽
候哉と申候へは自分若年の砌見覺居其後當分伊勢亘殿廣小路之本
か松嚴之屋敷にて候に其時燒申候由然共少々かたちは覺爲申候由
一鴈の二ツ有之候は能覺候其外委敷は不存候由
一惟新様御事戰場にても御腰に御茶入袋に入其上を彼にて御縫はせ御
さげ被遊御座候由たとへは御茶碗御出させ是にて立よと御意共有之
たる由候事

一後京極良經卿は歌の妙人也此時定家より老たる御方にて定家卿にて
候はん哉又は良經卿にて候はん哉と爭申程之妙人にて候に定家も良
經には不及と内心には被思召候由俗に申傳候は良經卿御病中に天井
より鍵二三本さがり申候由申傳候左候へは實否は不知事候へ共先定
家卿は余り賞翫不存と咄にて候事

一森傳左衛門山路喜平太繪は此頃には探龍に似寄申候哉と相尋候へは
成程至頃日探龍など程は御座候扱夫に付いつそやしかり爲申由喜平
太え北郷權八殿より字治川先陣の繪を御書せ被成候節下地を書持來
見せ申候處見申候へは別而ぬるき佐々木と相み得候先此咄可申聞す
由にて咄にては先陣の佐々木生て可歸存念もなく殊に向の岸には
大軍有之必死と相極たる模様無之候て右の繪の心に不叶候殊には諷
にも有之通馬いかだを組流るゝ武者には弓筈を揃へ互に刀を可合と
有之趣より見れば別而ぬるき事也馬いかだとは必死と馬を押揃渡事

也ケ様の心得にて平家物語にても見候て可書調由申聞書直せ候由か様の事にいまた不案内に御座候由よしもあしも咄は是迄にて相濟候事

一 數寄屋に爐を入候に入所相究たるもの候哉と相尋候得者爐の入所不存候然とも爐より亭主出候所間遠く有之候は別而ぬるきものに候先數寄屋は風の不通様か肝要之由子細は茶を給候に脇へ手をひろけ給候と茶氣格別に候故其心にて外へ氣の不洩様に相拵かよき筈と存申候紹鷗にて候歟茶を給候に小口に吞一日もかゝり吞度ものと被申候由傳承候か様に昔之人は茶に必至と執心有之候故格別成事と可存咄由にて候事

一 業平之繪などを御頼申人多く有之由承候がいか様成所の趣向に憑とも御座候哉いかと相尋候へはされは其事と社靜隱にもいかと存

申候先業平と申は淫亂不道之人にて當分にて申候へは大科人と存罷在候然共憑にて候へは先書は書申候然共一々合點不仕候伊勢物語杯を見申候に一所も用に立申所無之然共融大臣ちかの鹽竈と今一所此二所迄にて外に見所と申は曾て無之候搆て若衆など伊勢物語源氏なとは不入事としたゝかに咄にて候

一波江野次右衛門と申候て下町人有之處靜隱には若き時より能存知罷在候由今日名酒作之酒とて少々遣吳候間可給旨被申候付給候に是之酒を持せ候に手紙相添候に名を附吳候様にと申來候存寄は無之哉と被申候へ共少も存寄無之通に子息嘉右衛門殿被爲候に右次右衛門俳名を翠柏と申候て名高俳人に候一出來發句御座候是をとり御附被成間敷哉と親父へ被申候に其發句は失念候と被申候に
ねた牛は川むかへ也初櫻

と被申候へは初花かよく候初花と可相附とて暫考被居候に花のな
 よみ留かあしく候此間波江野自作にてさゝ波と被申名酒有之候其已
 後自分妻相果嫁も此頃相果候故其後次右衛門參候砌此間さゝ波と
 いふ名は其箱之□と別而惡敷□候と申聞候へは夫は何様之譯にて被
 仰候哉と申候に付先さゝ波之さゝは妻にと假につかひに相用候波と
 は□をなみなとゝ障のなきいふ事よりつゝきて見れば妻のなきと申
 外無之候と相考候由咄申候へは是は御尤と横手を打申候由ケ様成事
 に候間名を附候はよほど念を入候て不叶事故何之事もなくちとせと
 可附由被申候に興有之候扱又波江野がちとせかと申候は祝之座な
 とにては一ト涯興も面白筈にて是か可然由咄にて其通に相成候事む
 かし九月廿八日の人の物毎に名を附候は右之様成字遣に甚念入候由咄にて候事
 一平田大休坊と申す人惟新様高麗入之時相渡り高麗より持歸候井戸茶

碗光久公御代に其子様より進上仕候由于今平田井戸と申候名高きも
 のに候其時一所に持渡候はんす是又箱に入其比迄は所持にて候へど
 も拂に出候由右箱の裏に高麗より持歸候井戸茶碗と其残一ツと書付
 有之候由扱又ははんすと申ものは當分新渡と申よりも古きものに候事
 一獨立は俗にて候に合戦之親子に離唯壹人にて官人にて候へとも無寄
 方事にて日本に渡り被參候に於長崎に出家を遂被申候由
 一入組候事有之功夫すへし
 一獨立眞文字之儀光久公兼々御咄に獨立の直弟子深見元泰が眞文字も
 行草などより不勝下手と御意被遊たる事候由左候て深見元泰御側奉
 公申上被居候得共江戸御供などにて脱體長崎生立故別而難儀に存御
 斷申上長崎え罷歸候已後元泰が眞文字を出し可差上由にて御前え差
 上候處御習可被遊由にて其時御側え御書物書とて五六人能書の分を

被召置候其内壹人え先元泰が真文字を習可申由光久公にも御習可被遊にて御習又は御書物書も習被申候得其少しも似不申候由然に御書物書より申上候は元泰が真文字中々習得共もの無之段申上候得は光久公我様にも御習被成候得共御寫得被遊事御成被成由にて其時上手にて候事と思召被出候由

一近衛様いつ方えか御出之節静隠事も參合居に准后殿は未御渡不被成がことの外おそきと被仰候由

一但其時獨立真文字の掛物に

一惜昔天台と有之

一此渡の字の意に引言に被申候事

一當分^出出戸茶碗と大形申傳候は古萩焼にて候由古萩は夫にて勝たるものと可相考由

一石頭禪師の弟子に大梅と申後チは道德の出家有之候由大梅事石頭え不斷被附居候て修行有之に見所を今日も得探附不申此日も既に暮とて暮前には必空しく過と申候て泣申され候たる事數年に及候由或時石頭禪師より即心即佛と被申候に此一言にして忽大了に入たる大梅之由其後大梅は山之奥と柴之葉など綴り引入居たる人之由左候て其後石頭より使僧を申附大梅へ安否を被問に若大梅より此方にて替事も無之哉と問申候はハ一つ替りたる事有と云へ其趣は此間即心即佛にて候得共至此頃は悲非佛と石頭には申候由咄候へご使僧え申附置かれ候に案のことく大梅より御替は無之哉と申候を右之趣使僧より申候へば任地我は即心即佛と被申候を使僧歸候て右の趣石頭え申候へは大梅熟せりと被仰候由

一伊勢國え居候真言宗之出家文照坊と申人有之候其歌に

慈悲の目に悪しとおもふものはなし科のある身は猶あわれ也
 一右文照坊伊勢より京都え往來之時中途え宿を被附候大身の者有之其
 處に必宿にて候に京都え被登候砌ある時静成時分にて候哉柱え帳
 有之候を引揚々々見申候に大福帳にて通ひ附たる帳にて候を一扁見
 被申候て見被申候分は熟讀致居られ扱々大商はするなど被申候て先
 其宿は罷立候由左候て京都へ滞在又々下の砌右之宿を被問に焼候由
 左候て是はにかゝ敷にて候挨拶など被致候に亭主も一通りの儀な
 と申候へは又々亭主より心安きに任申候は大福帳焼捨られに込入候
 由申候にいや其帳は先度罷通砌に柱えかゝり有て候帳にては無之哉
 と被申候に成程其帳と申候へば末迄は見不申候得共中程迄は引あけ
 見候て覺候間先書付見可申由亭主へ被申聞候へは甚嬉し存書付
 候に少しも相替無之其趣を以代取に遣候へは其分は相知都てかねを

とり附候由それ程に氣臆の強人と申候由

一柵尾明惠上人松茸好きを被泣候事

但此事失念

一静隠え相尋候は御手前には幾度江戸え御越候哉と申候に御□前兩三

度江戸え參又一度は上御屋敷え一年詰居被申候由

十一月五日

一通茂卿御懷紙永田元繁所持いたし居候を静隠方え茶を立候砌相用申
 候由其後借置候趣にて候其懷紙は萬葉書也其趣之咄にて後チに静隠
 被申候は御懷紙も數寄屋などに相用候には閑居などの山家又は雪月
 などの類にて候はねは佗不申候千代や千とせなど、有之御懷紙は數
 寄屋にはのらす候先祝事候には床は壽老神にて其次の間有之候と千
 代萬代など、有之御懷紙などもよきもの、由とかく御懷紙にて候佗
 たるものかよく候由

一慶運の三首懷紙上町人所持いたし候由あまり珍敷又申候故其歌を寫置候由にて其寫を以又載す

冬月

慶運

冬さむき雲のなみたつうらにたによるくこほる月のかけかな

歳暮

山さどにようなるはるとおもふにはなをしたはるゝ年の暮哉

但右二首の跡に戀の歌有之候を下の句は切離し候由今案じ見申候

に此持手は心有人より戀の歌はいやに存所より下の句切離し表

具爲仕にて候はん扱々珍敷歌の上此持手迄も存やられ面白く候

左候て御當地にて相求たる事にて候哉と相尋候へは寄合已上の

衆の宅より出候を相求たるとやら承候由咄にて候扱又慶運と申

候人はいか様成人にて候哉と相尋候へは頓阿などの時之和歌四

天王の衆の一人也

一田原焼先祖之茶碗にて手前を以薄茶を給申候事

但安南を御寫させ爲被成ものゝ由

但古帖之類にても候はん哉と相尋候へは先本は皆帖佐也其後段々

と子孫多くにて白焼などは皆一樣に似寄候然共田原焼の手回を

はあみの手薬とて下地白きに少々青き様成薬の綱の目のごとく

にかゝり有之候か田原の家也皇山ミヤとは本は同し事なれ共段々と

跡にては分れ候て如此違也夫故立野の元祖と申候ても先は一樣

之もの也

一嗟峨に庵を結居被申候獨照と申出家隱元と問答有之候由其時之隱元

より拂子を渡されたる程之人之由其時隱元より唐え被申越候趣は日

本に渡り候ては學文の便りにも可成程之儀不被覺候處に今度獨照と

いへるものに逢候て其問答之句を書附唐弟子兄弟類え遣被申候に唐よりも聞しに増る事の由にて褒美並祝儀等申來たる程の人之由然其問答之句は不覺候由咄にて候

此時右獨照筆之掛物懸り有之候峨山獨照と有之

一右獨照にて先咄いたし可聞由にて承候は嵯峨え庵を結び居候節いか様秋之比にても候哉松茸狩嵯峨え家内一統に來りある日雨ふり暮過に成候に右庵の門邊え女の聲と聞泣聲有て候をほの聞不審に思門外へ出見被申候に女之様子にて泣居候其時獨照より被申候其方其門前にて先より泣と見得候歟いか様事かと被相尋候に扱々忝奉存候私事は今日茸狩に家内の者共列立參候に親など酒にたへ醉其時女には山陰え罷在候にいつ罷歸爲申哉見失可相尋得共日暮雨ふり申候てあまり悲しく存候故此門前にて泣る申候由左候て女より申候はケ様に夜

に入雨にも成申候へは十方に吳候間御宿を御借し可被下由申候へは獨照成程安き事に候爰元は寺にて候然共行方なき者と見及候あいた可來由にて内へ入被申候にいろり有被候故大など焼ぬくみ可申由被申候に忝存居候處時も更候故可寢の由被申候へは女より申候は女にもよし有ものに候得者着物迄にて難寢入候間今一ツ御着替御借可給由申候間安き事とて借被申候可臥居候歟夜中前にも成申候哉此分にては難寢入候間御ふところに御入可被下由申候にて成程安き事とてふところに入被申候節女よりおかさんとしける時獨照きつと聲を揚おんなく早く出よ獨照を落さんとする事心得あり其方か了簡にて無之親などより申付來たる事目前に知たり早く歸れとて手を引門前え引出し追出され候節段々と斷申達左様にては無之由申候へ共いや生くとも死とも無構とてきつと門を被引入候由其時いつれも申合候

者共驚き申候て歸候由其時迄は獨照もいまた年若候得共右の次第之人故京都にても夫より尊敬いたし段々と建立にこれなり今は大伽羅(籃)の由

十一月十八日

一先日於御書院種子茄子の御茶入致拜見候由咄致候へは扱々結構成ものと被申候左候て右に付能咄御座候右御茶入は日本一之物にて候子細は信長公御所持にて候を本能寺焼失已後種子島え相渡居たる物にて候此儀は聞及も有之候半右御茶入と將軍家へ御座候つくも髪と申御茶入同類の物に候へ共つくも髪は割れ申候間藤重藤ゴんと申候え御繕被仰付其後繕相濟候て右藤ゴンえ御預け被召置候由美代爲庵なとは態と藤ゴン所え參被申拜見爲仕と申候種子茄子こそ小茄子と申候て茄子も小きか別而賞翫なるもの、由承候古き茶書を見申候に心掛候て折角と致修行二十年に成と右小茄子のアツカイ拵様を教ものと相み得

候小茄子あつかひ様はあまり面白小鼓の稽古と同前と申ものの由候夫程に手に入候へは面白き手業之由爲庵は小茄子之あつかひやうも存居罷在筈と存申候へ共別當分鹿兒島にては捨り申候由

一稻留幸阿彌事細工も有之物にて候然處に藤代川御茶碗焼に參居候處に藤代川之土を以右種子茄子之形をうつし黒藥をかけ三ツ焼申候へは殊の外出來も似寄申候由其時靜隱も一ツ幸阿彌え被貫掛候故兼て心掛も有之候故とれ成共取可申由申候に付一ツ貫置候由則種子茄子にて候其後京都え參候砌右幸阿彌余り申候茄子に蓋袋を可致と存東山御代より蓋師之家左近と申候有之候に付右の方え相憑遣候に左近申候由爲持遣申候者より咄承候扱々音に聞小茄子を初て見申候然共出テ所はいつ方よりと申候に付持參候者は薩摩の方より參り申候へはいつれ薩摩にて無之候はてはケ様の者無之筈候然は當分之唐にて

候はん先小茄子の形は是を社第一之茄子と申候由にて弟子共呼寄せ
 見せ被申候由左候て此蓋は傳授有之候とて傳授之通引調靜隱方え遣
 候由于今所持にて候と咄にて候左候て京都にて滯在中右之茶入の儀
 聞及段々と參候て古き瀬戸は段々と所持仕候其内より御氣に入候を
 可指上候間小茄子はとふそ可被下由大身成町人共申候へども是は些
 子細有之ものに候故不罷成由申置候細工は幸阿彌にて候と咄にて候
 事

一かうち物と申焼物は唐にてはいつ方にて候哉と相尋候へは南國之も
 のと被申候別而南によりたる所之由琉球人など參候所よりもいまた
 すつと南にて焼爲申候をかうち物と申候由左候て京都にて焼爲申蓋
 置などに青竹などをするは直にかうちに見紛申候由右かうちは薄青
 藥紫藥にて候

一今晚目利を相集いたし申候に付御持合之茶碗類目利に可成品も候は
 は御借可給由申候に黄いらはか入焼二箱借受持歸此加入焼は加入藤
 代川え參候節靜隱にも參被居目前にて爲焼申ものゝ由則高麗はけめ
 と相み得候からものなどは高麗はけめと相究爲申由

但淺黄色りんす之袋に入蓋之銘ははけめと書付有之右加入焼ほと
 出來爲仕も鹿兒島にあまり多くは有之間敷存申候由咄にて候

十一月二十九日

一妙谷寺教州和尚昨日福昌寺住職被仰付候に付靜隱所え被參居候其砌
 參會候に福昌寺開山石屋和尚の畫讚の寶物は深固院に有之由右の寫
 靜隱福昌寺被致居候由外に一幅御寫可給由を折角と教州より被望候
 に我等若時分に寫置唯今迄拜み申候間先是を進可申候間己後一枚唐
 紙に寫置可申候て是懸物にても又は己後寫申候ても御取可被成由に
 て被相渡候へは教州被悅則持歸被申候

但七言絶句詩有之石屋之自讚也左候て像も自畫自讚と申傳候由申候得共靜隱つし見申候に繪は中々石屋などの筆に無之候然共像之脇に松の木有之此分はいか様石屋之添筆にても候半と存し候由其時咄にて候

但鐘杖も有之候是も如何様石屋のそへ筆にても候哉と相見得候

一深草元政長クいか様成人にて候哉と相尋候へは井伊掃部頭様御領彦根の人にて候其時掃部頭様御子様被成御座候に御乳を召付候に御乳差上候女幼少の男子有之候間召列御乳差上候様にと被仰付召列御奉公申上居候に漸々と成長いたし字を能學申候に付御側へ被召仕御用役被仰付候由其後出家成之御暇申出候に是は不存寄申事に候我等爲には乳兄弟に候へば無據由緒の者故先々は品を替可召仕存候間御暇

は不被下段被仰付候に又々三度に及御暇の願被申出候は先々品能被召仕思召の儀を出家成の御暇於被成下は本望に存候由餘りわりなき願に候故御暇被成下候左候て剃髮直に京都え引入候由黄蘗隱元とやらに出家を遂則問答にて拂子を被相渡たる元政之由元政事は右次第故黄蘗派にも不罷成やはり元の法華宗にて元政派と申候て當分迄も有之由

但俗名は石井平五左衛門とやら申たる人の由

一はくちが明暮咄し居爲申儀覺罷在候子細は惟新様御用被遊候御茶碗を御割被成繕ひ被仰付候由是が茶の湯の骨と申候由はくち咄居候由但其跡にて靜隱咄にて候は此間下拙より遣見^(マ)り候赤よく燒茶碗は別而可愛出來にて候間平日相用少し古く相み得候は、可然由少々古く不罷成候へば殊勝に無之候由左候て

惟新様御割せ御繕被仰付候も割れ茶碗にはもはや横(本ノマ)の不知處御座候是を以見れば骨成と也

一南蠻の水指相求候て頼見べき由にて持參候處別て譽被申候兎角水指は手もなく筒形にて無之候ては能無之由此筒ヲ譽被申候儀は毎度承事に候右持參致候水指御物に有之うしやくに則似申候由無雙のものと被申候事

一赤松次郎右衛門殿には諸事心掛にても有之人候哉と被相尋候に付返答申達候は先脱體發明の人にて其上茶の湯別て好にて候又は歌にも心掛有之其上能書の由申候へは扱は左様にて候哉と赤松殿家には代々心安有之由然にめつらしき咄御座候赤松氏兄弟先年隅田川より船にて楠正成の御鎧又は諸道具開帳有之節同道にて被出候に船打返し其時兄弟共に水底に罷成死去候由其時川下へ船頭共居候に水底に本

結の白き色相見得候に付人の様子と見請取揚候得は若衆にて候由水を吞たる様子有之候間船頭より据出し候へば水を吐申候間生申候由其者は右兄弟の同船に乗居候赤松氏の由緒有之と申もの、由然に赤松兄弟隅田川にてか様の事と申候て楠御道具は不便者にて開帳の由申觸候由右兄弟死去候日に楠を赤松入道責申候由月も日も相當申候由不思議成事と申候事

但其朝は赤松氏兄弟共に被乗候を静隠にも櫻田詰合にて其朝迄は馬に被乗候と見罷在候由

一維摩は釋迦のおちきにて候由維摩病氣杯の節釋迦より使を以左右を被爲聞候わんとて使を被申附候ても維摩餘り徳ある人にて可參と申もの無之由然に文珠私可參由病中見廻に被參候に維摩一口も物も不言して黙して被居候歸申候ていかゝの次第候哉と釋迦より仰候に維

摩の黙如雷と文珠被申候由候事

一上町に罷在候俳名はキンホと申者の由右の者頼母殿宅にて發句いたし候由承候歎此發句は承及候哉と被申候付不承由申候へは先其發句に

庭松の懷や深し浦千鳥

と申句にて候何様に聞得候哉と被申候に何様共義理に不辨難承知候と申候へは成程不相知候大坂杯の風かか様に存候事故不知事を第一と致候由承事に候先おかしき事にて候然共町人杯の俳諧類にも氣を入いたす事は先風流の事と存候第一生出來錢の生立にて人の様には無之候然を少にても風流に存は先よき事と被申候左候て古き歌にも山懷と申儀は有之候いか様左様成にもより候て致候半哉然共松懷と申儀は有之間敷候由物笑にて候事

一只今古き歌を存出候間書付見せ可申由にて其歌に別紙直筆有り

野も廣し草葉も多し人もこれ摘なになれは扱もすくなき

右之歌を申由是は下拙など諸士をつかふにも此心得を以見申候は、人少きものとして可存候別而若なの歌にはめつらしき何の心得にも相成歌の由

一此日も如例手前にて薄茶にて候に本狂言袴うつしの茶碗にて候に手に被取候時是を一所に左右の手にて取申候歎惡敷候必本の稽古の仕込初手は肝要と承及候

一貞室流と申候て唯今は皆仕事候へ共申ものゝ手數の由稻留幸阿彌申候は貞室老御手前は直に美代爲庵か手前に少しも替り無之由申おり候左候て色々と六か敷事稽古に及間敷候惟新様利休え御習被遊候に付ては昔の教を利休へ直傳の茶の湯にて候間是を學可然由たとへ他

所の人相尋候共右の次第を以申達候得ば少も不足無之候先惟新様には右の義申候て御茶碗を被割候て繕迄も被仰付候骨に成候事被存申候へは御筆所持致居候は、必茶會には相用可然由靜隱にも折角相用可申存相求候得共求出不申候由

一ある出家此間參候て書付見せ申候歌の由と

降る雪にをのか姿をねわすれて朝とまりする小田の白鷺

右別而面白き事の由

十一月二十五日

一今日靜隱殿宅へ參候に紫野大心梅大文字に正一位柿本人丸と有之掛物被掛置候に付珍敷もの、由申候へは直に咄にかの大心は身を能處したる人にて候先大德寺は近代名高き人も無之候處右大心事は此前の住持にて候に別而風雅の人にて候由柿本人丸千年忌に相當候年當年は人丸千年忌に相當候が禁中にては御沙汰も無之哉と被申候に何

の御沙汰も無之右大心の咄か様に申候由相聞得候に年代記等被相糺候處に無別條千年に相當候由左候て從禁中右大心によき事を申候とて御褒美有之候由左候て人丸塚え勅使等被仰付御歌の御催共有之候由勅許により此時正一位と人丸の儀も申候由畢竟大心の人丸の事に付第一京都にても名高爲申由左様成大心に候故右の掛物も其時の事を存候へは珍敷ものを見當候由扱又京都にても近代には右大心の筆は數寄屋にて掛物に仕候由羽箒の繪に讚有之掛物にて茶の湯に逢候由左様成事の由咄にて候

大心事住職は三四年京都は六ヶ敷由にて境え隱居これにて身を能處したる人を可考由咄にて候事

一右掛物梅の字上に久かたの雨霧雪かなへてふれ、はと申歌有之と申候へは西行談集と申書物は西行伊勢之二見の浦に庵を結被居候節伊

勢神職の者弟子有之西行の弟子にて候に西行より咄承候ものゝ由其中に人丸の歌にほのくゝと申歌はいにしへより不過之と申傳候へ共此歌は西行にも讀出しそふ成歌と被申候由然共此梅花それとも見へすと申歌は中ノゝ及所にあらず少も存寄無之由被申たると西行談集の内に有之由靜隱咄にて候

一此節相求候御判手別而宜敷候由中にも御判二ツ有之候故猶以能候由咄にて候

一今日も惡敷薄茶有之候間申候様に被申候返答申候へは手前にて薄茶たべ候茶碗は筒茶碗にて繪高麗にて可有之由咄にて候

一此節相求候金花山茶入の咄いたし候へは是又別而能候由金花山とは見へ不申候時代は存不申候へ共あれ程格合の能茶入はあまり有之間敷由被申候

十二月二十七日

一歳暮に龜茶可進由申置今日御判手茶碗并一所に相求候茶入水戸黃門

様御製之茶杓元政掛物南蠻筒形之水指等持越手前いたし龜茶後むかし進候に終日咄共いたし茶事相濟と直に靜隱老被立箱壹ツ臺に受可

進由被申斷申候へ共今日は禮の由にて唐津大茶碗貰請申候
但元恕被參居相客にて終日咄共いたし申候事

一花下紹巴短尺の珍敷を見申候由咄にて候其題書には逢坂の關に山居せし時歳暮とやら有之候由上文字失念下五文字は七十のみ冬のとしの暮の空哉と有之候由中々大躰の公家方よりは面白き事に候由珍敷ものにて候

一つくゝと相考候に紹巴は餘程魂の利たるものと存被申候子細は明智日向むほんのくわたて有之時其意にて京愛宕え寄進に連歌を致候間紹巴え發句をせよと被申候に紹巴も其時より右むほんの企有之心

躰は察し候故其天か下知るの五月哉といたし候由いか様其砌夏の比
 にても見と存申候由右の發句を以百韻かを被成候由其清書を致候時
 紹巴智と申字を書いやと申小刀けつり又本の如く智と書置候時何事
 を致候哉明智殿より被問候にイヤ少し書違候と申候てけつり又本の
 如く智と書付候由其後信長公を討案のことく明智の天下被成候時太
 閣様より段々と御糺有之候節京都愛宕え紹巴の發句に明智殿百韻の
 連歌有之もの御座候由相知れ候に太閣様御詮には紹巴もあれ程迄名
 高きものに候へば折角明智か方え一味の儀も無覺束とて被招呼右の
 軸物を御見せ彼か發句にては無之哉御尋候に成程私の發句にて候と
 申上候へはかのむほんの明智え一味かと被仰候へはイヤ此發句を見
 申候にやはり私の發句にて候書中トモ私の書跡にて候が此知の字は
 御覽も被及候通消し爲申跡御座候此か違と申上候へは誠にトモ太閣

様も上意にて又あれは發句は何といたし候哉と被仰候故天か下成と
 紹巴には仕候由申上候目に見胸にうつりあるは明智にては中々天下
 は長く無之と紹巴存候事ありて智の字を則けつり又智の字にいたし
 候儀にて魂の利たる事相知る也

一其後山崎合戦にて明智を太閣様御討被成候節紹巴草庵の前をいつそ
 や被爲通候に紹巴居るかど被仰候に罷在候て門外え罷出候に太閣様
 より久敷本望達たる由上意にて候に紹巴申上候は御怪我は不被遊候
 哉と申上候にいや御怪我は不被遊段上意有之候由目出度奉存候と申
 上候由此目出度と跡にて申上候事未聞候事の由咄にて候

一山田元徹とやら申人の宅え靜隱若き時分永田元忠四本庄藏殿被召列
 被參候に元徹事大せきにて茶入より茶を疊に被捨候に興覺め候故元
 徹事直に舌を以右の捨り候茶の大切成事を思ひなめられ候故口のあ

たり眞青く扱々おかしき事にて候由笑被申候と咄にて候
一右の元徹所持之織部焼瓢箆の茶入有之候由其藥青くして能き茶入の
由其後京都え被登居候節織部焼の内にも青茶有之候は別而賞翫致
候由山鳩と申候て焼之青茶を秘藏いたし候間元徹之茶入も山鳩と見
へたりと被申咄被申候は別而悦にて候由
一右の元徹事ふき釜好きにて段々と釜を被求候へ共ふき釜無之候由其
致様と申候歟釜の口まで水を被入候故強くにへ候ともふき不申之由
夫より静隱老被申候は段々と釜も御求候が其内には釜可有御座候餘
り水を澤山に御入被成候故ふき不申筈と被申達候へは成程御尤に存
候由にて少々水を被入候へは案中ふき釜有之候由ふき釜と申も湯の
わき候ほけ内にてふき申候てふき申事にて候故其時落着にてよろこ
び被申候事

一御判手の御茶碗の直に初代にて御座候哉と相尋候へは成程初代にて
候夫に付咄に承候は御庭の内に細工所有之御出の節御小姓御腰物を
持參居ゆるくと御座被遊つるしの茶碗を御覽被遊是には判をおせ
と御意に付直におし焼仕舞候て悪敷御茶碗は割居り爲申由左候て御
茶入も段々御好みにて右の細工所にて御覽候時疊には茅むしろにて
候に何といたし候哉取落し候由夫よりやはり其通にておけと御意に
て水の引候時分取起候様に被仰付直に取起候て見申候へばむしろの
形を相附候由夫より直に藥を掛けよと御意有之さむしろと右の茶入
に名を御附御秘藏被爲遊ものゝ由其行衛いつかたへも參候か不相知
由加入申候由

一茶相仕舞右の禮として唐津大茶碗被送候に咄にて候は寒の中はケ様
成大茶碗の不都合成ものにて相用釜杯も大ふりにしておんむらと有

之を用候時能く候由靜隱の言葉に自分杯の如く年寄り候ては右通の事も不能成候間隨分若き内右の通品々は相用候歟能く候由

一茶道具持参いたし吸物杯出候て追て茶をも立可申哉と存候砌子息加

右衛門殿え被申候は庭え白椿は咲候はん哉左候は、床の花入之の水

をかへ生替置候様に被申候畢竟心入厚事と存候

一狂歌を讀申候由にて筆を被取鳥羽の繪にて可有之由にて其脇に鬼を被書又其讚に

とやせましかくやせましと明しきて鬼よりこわき年の暮哉

と書被申候に少し書違有之候故今一枚可書置由にて外に被書直申候を被送候最前の書違は永田元恕え被遣候

一歳暮の歌の由にて書付貰申候其歌に

待こともなくて暮行□□花ゆへ春をおもふ隠家

と申歌にて候

一ある人の狂歌の由被申候へとも終日の咄故致失念候其人歳暮に罷成借錢の儀に付毎度銀主方より返濟等の儀申懸り候故餘り氣の毒に被存候哉其歌に是又五文字は失念しかし死たき年のくれ哉と被申候て笑被申候事

一御判手御茶碗の儀色々と咄共申候に惟新様御手つからこれへ押よと

と出來の御目利にて被仰付たる御判手薬をかけ仕舞不出來成は其場にて割捨に被仰付と申御判手に候へば大切成物に候故町人杯いくらも所持いたし候事の由右次第のものに候へは町人共にはもたせたまむなど守りと申ものにて候由

一永田元恕被參居候節後水尾院様御製に

立さらす心の底を住かへよ里の庵もふかきかくれ家

と申歌有之候感吟不斜由申候へは静隠老夫に似寄候古歌御座候由
静なる隠れ家もなし山里にもこのころをつれて住身は

と被申候

寶曆六丙子正月二日

一年頭の爲祝儀參候處に今日は書始いたすの由にて障子を立被居候砌
參合候よりふしの玉串柿昆布杯墨繪にいたされ候由二枚程致披見候
段々と人の頼有之由又候吉書迄も披見申度由申候へば見せ被申候其
吉書に長生殿裏春秋富不老門前日月遅心たに誠の道に叶なはいのら
すとても神や守らん年號月日静隠老判有之候又候歳旦の歌の由にて
吉書と一ツに包有之候故望見申候に

七十の後も八年の今朝の春いとけなかりし心かわらす

と有之候静隠老咄にては此歌は直にありなりにて候何ぞ申事も無之
由咄にて候

一掛物に近衛様御詩を床に掛ケ有之候御名は廬舟と被遊置候其外壁に

弘資公通躬公又は千代の御姫短尺有之候其中掛物に

竹裏鶯

通躬

春くれと花なき竹の林にもおきふしになく軒の鶯

江春曙

心なき身にもしられて難波^{なみ}やたくひも波の霞む曙

右二首の御歌の末に戀歌有之候由然共右之戀は切捨人にくれ申候由
咄にて候鶯の歌に花なき竹か出來申たる様に被存候由子細は鶯は花
になくと申事を花なき竹の林と御座候は面白く候由又末の御歌は
こゝろあらぬ人に見せはや津の國の難波あたりの春の氣色を
と申歌を本歌にして被遊たると見へ申故歌も右の通に取被遊候へは
面白候由右の咄終而後に竹裏鶯江春曙御歌御若年の砌被遊候はんと

存申候餘程能御出來被成候と相見得候子細は御親父通茂公被遊御座候砌にて都而たしかに其時の御歌被遊候由何歟通茂公は古今の御銘人故御指南も嘸能有之候わん又中院通村公はあまり歌のつきぬけたる御生附にては無之由物毎丈夫に歌を御讀候由其子細は御親父様御咄の由通村公には今通とやかくと歌を讀候は、後には又とやかくと歌に可成被仰候由承候へはあまり勝たる御生附にては不被成御座方と存申候由然共御銘人の御親父様御若年の砌までは被成御座候て御指南の御歌故都而丈夫に被遊候由此竹裏鷺江春曙も其比の御歌と相み得丈夫にして面白候由

一歳内廿七日に龜茶を致持參相立申候に皆々共に無殘所道具にて候殊に古帖佐并瀬戸茶入は及兩度拜見申とかふ可申様無之ものに候又候昨日伊集院嘉左衛門被參候て何かと咄致候に先日拙者參候て茶を致

持參道具迄も持參にて相立候に道具を被尋候に左様〜と申達候茶抄の別而珍敷由申達候へは誰様の御作にて候哉と被申候に付水戸黃門光圀卿御作の由申候自分も上方にて光圀卿御作一筒拜見候然共其御茶抄には御名も無之が先日相用候御作の御茶抄には西山と銘迄も有之別而珍敷由申候へは扱々感心仕候嘉左衛門被申候其後にて先つ光圀卿と奉申は文武二道の御達人にて無双の御方にて候ある時公方様より御使者御座候時の次第を嘉左衛門え咄聞せ申候歟いつそや御咄申候様に覺へ候由被申候に久敷事にも候はん儘今一往御咄承度由申候て其咄に光圀卿御隱居の砌御屋敷廣所にて候故後口に畑を通細き茅薺の小座を御拵被遊御座候由或時公方大猷院様歟御使者被參候節御式臺取次番え光圀卿に御上使に御出の由被仰候へは取次の者則申聞候間一刻の間御待可被成由にて内へ引入追付被出此方え御通可

被成申候て案内にて右の御屋敷の後口に參候に段々畠有之其先に中門有之此涯え御控可被成由にて案内の者も控居候に頓而黒つばの下の者中門戸を明此方え御通可被成由にて被通候に光圀卿御老人にて候へはるんかわ迄御出候て此方え御出可被成由被仰候へは御小座え被參候上使に參候由上使より被申候に上使の儀候故必高く御座可被成由御申達久々御左右も不爲被聞候に付御案否御尋の上使にて候旨被申候に光圀卿謹て御聞被成御下り被成候時御近々下候由其時光圀卿より上使にて候間必高く被成御座様に被仰達候へ共最早御口上も相濟申候由にて被相下候由左候て光圀卿最前の上使御出の砌中門を明候下々を御呼上使の事候て御馳走を申さすは成間敷由にて御小座の棚より錢二百文御出し是にて見合御馳走可申上由被仰付畏り候由にて外方え買物に被出追て罷歸候に豆腐と手樽一ツ持參り候由此れ

にて御馳走可申上由しかも上使被成御座座内にて光圀卿え御目かけ候へは是にて吸物仕差出候様に仰付直に吸物仕候處を御小座にて候故御次の間にて候由左候て吸物等御出し追て上使も被爲立候半と被成候砌御請共被仰上扱能き序候間御傳言を可申候尾張殿御隱居に御申可給尾張殿御隱居にて家督の厄害に御成候由聞も不聞事と申候由上使に能序候間申入之由被仰候て直に被爲立候左候て最前上使御入候中門外え取次番は控居候右之段上使道々御咄にて候は只今光圀卿御側え罷居候下々は何と申たる者にて候哉と被仰候故御取次の者申候は光圀隱居の時家督方にては御氣に入候者を被召仕候様に被仰入候共光圀卿はいや夫には及不申候下々を一人給候は、水をくませ掃除をさせ申候はん唯一人にて相濟候由被仰候故光圀卿御家督にて被成御座候砌御近習役にて被居候者え罷出下々の勤私可相勤候間被召

可被下由申上一生御側え相勤罷在度由にてさらば其通と被仰直に其近習役の者下々奉公にて彼者一人罷在候由御返答申候事左候て上使直に登城候て御返答御禮の儀をも申上扱今日は替り申たる儀御座候由被申出候へは何事かと御尋にて右の上使より被申上候は光圀卿より尾張様え御傳言にて候御隠居候て御家督の御厄害御成被成候由聞も聞かれざる事と申候由能序に候間私え御傳言と被仰候と申上候へは御老中様皆々御吟味にて候へ共名高き光圀卿の御事故難申上事に候へ共其方參候て右の趣可申上由にて可然通御老中様方にも被仰上已後被參候て御傳言被申上候由先右通成光圀卿に候故其西山様の御作の御茶抄にて候由珍敷存候て右の咄申聞せ候由

但茶抄貰由緒の儀も申候へはとかく由緒有之者にて候わねは道具にて無之由

一淨味の釜と申候はいか成ものにて候哉と相尋候へ者淨味阿彌陀堂と申候て二ツ御座候へ共形も一樣無御座ものに候先阿彌陀堂と申釜は由緒御座太閤様有馬の湯へ御越の砌諸歴々御供候故宿に差つかへ申候故利休も參合被居湯阿彌陀有之候其堂守の所え宿いたし被居候に太閤様利休はいつかたへあるかと御意にて候へは阿彌陀堂の守所え止宿仕居候由申上頓て御入御茶被召上へき由にて頓而御入御茶進上申上候砌釜を御覽被遊候に古き能釜にて候此釜は太閤様御氣に入候間可差上由にて右替りは可被下候間可差上と亭主え申聞せ候へは將軍様御意にて別て難有奉存上候由則其釜阿彌陀堂と申候由左様成事故形も段々と違京都にも似せ候間淨味と申候は古き京都の釜かと覺居候由咄にて候阿彌陀堂と申候て本作は不相知事の由

一靜隱老事當年七十八歳と試筆にも相み得候右の試筆の上紙包の裏に

歳を被記置候を得と見申候時此八の字右をみしかく左りを長くも書申されす一様に書候ては見苦いか、致たるものにて候半哉と存居候に米元章石摺の裏に右を長く左を短く八如此相み得候に付是を可存候砌古き唐人書申候物にも又見當申候間彌右を長く左りを短く右の通可相用存候に付當年は七十八歳にて候間此八の字を書申候て可然存相用申候由

一白石氏被參合候に静隱老右の白石殿より承候は頓て剃髪を可仕存念に候間名を見立くれ候様に申候に夫も探元の元の字を上にして見立くれ候様申候共不文才の私故元の字に熟字存不申候段々と相考申候へ共考當り不申候唐人にも米元章又は何米元章とやら申候て兩人は御座候右の米元章も米は氏にて候へは白石の白をとり白元章可然由申候面白にては無之哉

一願王院僧正咄にて候由願王院の京都え被成御座候砌にて候通茂卿子息通躬卿御老年にて被成御座候由直に生きてある柿本人丸を見申様に候由子細は白髪を御立御ひけ迄も御立被成御烏帽子を被遊候て被成御座候と申事

一近衛准后様被成御座候御座の御閣え山水清暉と有之候由面白御見立の由咄にて候

正月十日

一梅之移影月痕香と一行物の掛物有之候深見新右衛門にて候右の句は新右衛門作にて候哉と相尋候へは成程作にて候静隱老江戸にて梅竹又は雑の内を御書可被下由御頼申候其内にて候鶴夢何とやら申句に對の片にて候由隨て右の掛物の印に天瀟と有之下に有之候白文の印に半榻琴書と有之候此印唐人彫にて候別て名高き能印にて候由句がら半榻は机え又半は琴書物扱と申候へは句と申作と申面白き印にて

候由

一今日迄も准后様御作の御詩の掛物かゝり候咄にて候は高位高官の御方と申候ても御一家御類中には左もなき御方様も有之ものに候此准后様御子家久公は關白様其妹様は女御にて被遊御座其御舍弟は鷹司様御養子にて右大臣とやら又當分にては御孫様杯申候ても江戸え被成御座是程勝たる御方様は無之由

一靜隱京都え滞在の節准后様より繪の御咄可被遊候間參上候様に被仰付參上にて候に日觀の蒲萄（ぶどう）の繪に自讃有之候を御見せ被成候に其時申上候は日觀の自讃は初て拜見仕候扱々珍敷御掛物と申上候へはあれは始て自讃は見たりと御意にて成程初てと申上候由夫より又出來はいかゝあると御尋にて候に出來と申日觀の繪出來繪と存申候由申上候へは是は臺徳院のくれられたる繪にて候出來も能候へは仕合の

由御意にて候由公方様の御事を右の通被仰候御方の御前え初て被出驚入奉り候由物笑ことくに咄にて候

一尺八を頼墨をいたし夜前被遣候にそぎたる様に墨有之候故右の御頼申候墨致様は何様成ことにて候哉申候へば竹細く花生られ不申筈候と相考候故歌口に墨いたし候由尺八には歌口とて豎にけつりたるも有之候由

一當分典膳殿所持の澤庵墨蹟の關雪の歌の掛物借用致置候歟右の歌は定て御覽爲被成筈候能候にて無之哉と申候へは成程右の歌の御掛物はいつそや拜見仕候殊の外面白存候能因法師の歌を御取被成候御歌にて候然共能因御歌よりは一季早く候由被申候て雪の時分杯にはあれ程の懸物も有少き筈と存候鹿兒島え右の御掛物程の御歌の御座可有之候哉能因の御歌は

都をは霞と共に出しかと秋風そ吹白川の關にて候右の掛物には

關雪

冥之

都出て秋かせふくとなかめしを雪さへつもる白川の關と有之候能因は霞と共に出て秋風と云澤庵には秋風より白雪によみ候を一季早く候と被申候はんと存候事

一夜前木村四郎左衛門殿の方え有之候榮雅卿の十首の御歌の軸物借用いたし候付右の咄靜隱老え申達候は右の三十首を寫し仕舞不存事なからくり返し吟し申候に讀書千篇の意にても候哉度々吟し申候へは何となく心にうつり申候に有之候と申候へは成程其通にて候昔大貳高任と申御公家有之駒迎の御歌有之其時は禁中え献上の駒奥州にては安達の駒信州にては霧原の駒とて逢坂の關え御請取に御下候

由其意を駒迎の御歌に候

逢坂の關の岩かと踏ならし山よりいつる霧原の駒

と被爲讀候て此歌は貫之の

逢坂の關の清水に影見へて今や牽らん望月の駒

と申よりも自分なから能叶候歟と被思召右貫之の御歌と御自分霧原の御歌とを何篇ともなくくり返し被吟候に貫之の歌は篇かさなる程深き心ありて不言事に面白有之自分高任の歌はひよつと聞たる時は面白様に有之候へ共數篇被吟候時何の面白事も無之候あまり不審に被思召其時俊成卿御病中にて被成御座候節屹と裝束を調病家え高任御見廻候て被仰候時俊成卿は御枕より少し御記被成候此節駒迎の歌をか様によみ申候に餘程出來申たると覺へ貫之の歌と吟し合見申候に自分の歌はひよつと聞たる時は面白様に有之候へ共數篇吟に

及候時は少しも深き事なく面白事も無之候由俊成卿え被仰候へは御返答に是は厚き御心入にて候それ程に歌に御好き被成候へは社本意にて候へ夫は如仰にて候上手の讀申たる歌はさし知れたる事の様候てひよつと承たる時あまり面白様にも不存候へ共及數吟候時深き心もあり又は面白意味もあり言葉つゝきもたしかにして胸の廣き時も相み得候下手は聞渡しは面白様に候へ共深き心なく候と被仰候へは是は忝存候由にて被爲歸候由左候て俊成卿病氣にては有之候へ共屹と装束にて見廻被爲歸候又狩衣にて病氣御見廻に被成御出候隨分御養生被成度段被仰置候時は平服の狩衣にて候由是程に古の人は歌にも信節に有之候由夫にて考合候に古歌は妙なものに候數篇吟申候て涙を催候事御座候今時の常の人の歌にては曾て無之由咄にて候事但右の儀鴨長明か無名抄にも相み得候由

一平田元右衛門殿歌書付おかれ候間見せ可申由にて見申候に江山春興多と申題にて候是は近々名越左源太殿所にて歌會有之由右兼題の由にてケ様に二ツ見せ申候由其歌にも皆々面白様に被存候間何かと申候に右江山春興多と申候へは武者小路實陰卿御歌御座候此御歌は古今の絶章と申事に候京都東照方にても別て御賞翫の由承候何と申歌にて候哉と相尋候へは書付可遣由にて別紙の通に候得共こゝにのせ置候打出て見れば氷のなかれ江につらなる山の雪間そひつゝと申歌にて右の歌禁中様にも此程に絶章はあるましく勅定にて候由其比あまり右の勝たる歌を以つらなる山といふ意にて連山様と實陰卿を申ならはし候由氷の春に流ていつるに山々の雪は少しつゝ消て雪間の添て多くなる景中々不申事と別て譽被申候事一加入苗代川にて焼申候瓢箪棚より被出候に餘程の出來物と相み得候

打込蓋の様子に候故いか様成蓋候哉と相尋候へはいつそや咄申候幸
阿彌か小茄子の戸澤參近の作候蓋にて候瓢箪には右の茄子の蓋を借
て用かよきと申事の候へは夫故取合置申候由打込蓋にて候へは置て
見申たる時がよく御座候此袋切れを見可申由被申候に見申候に別て
古く相み得候静隠老其時咄にて候は大事なき古ごんすの切にて秘藏
仕置候處に鼠かゝり申候由にて間々切ほかし有之候右の蓋の儀珍敷
咄と存候事

一昨日大脇源五右衛門被參候に棗ナツメ七ツ薄茶を替りたる事にて貰申候間
吞候様被申例の安座にて手前相濟茶碗を望申候にいらほにて候中古
より少し古きかたと見へ候由咄にて候又終而昨日正國寺被參候に此茶
碗にて出候に太閤様御代と見へ候由被申候委敷目利と存候と被申候事

198
415

